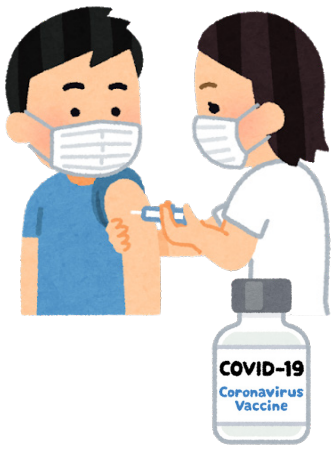
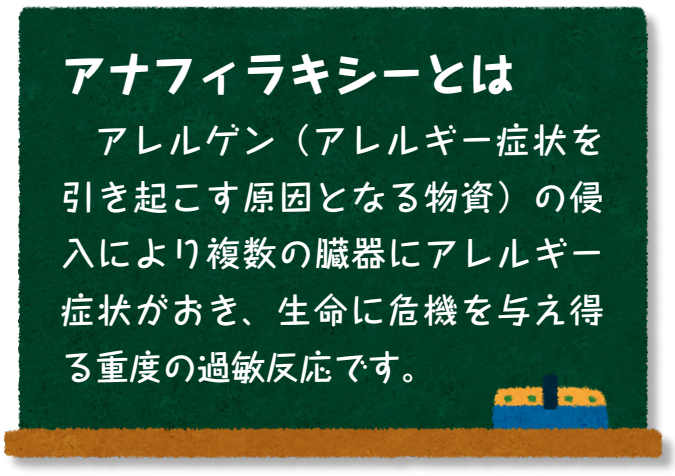
アナフィラキシーショック

副院長　韮 澤 融 司

新型コロナワクチン接種がすすんでいます。新型コロナウイルス感染症のまん延を止め一人一人の生命を守るにはワクチン接種が最も有効です。しかしワクチン接種によるアナフィラキシーショックのニュースが度々報道されるため、ワクチン接種を躊躇している方も多いかと思います。

ワクチンを受けるかどうかを判断するためにも、アナフィラキシーの発生頻度と、そもそもアナフィラキシーとはいったい何かを知ることが必要なので、わかりやすく説明させていただきます。



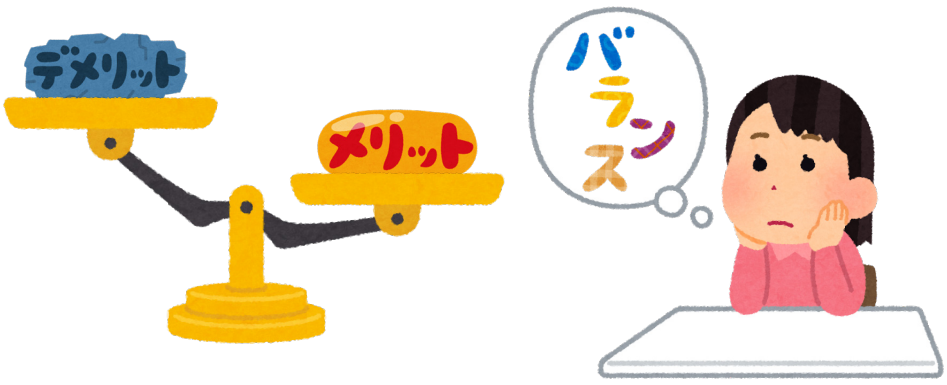


そばを食べたり、蜂にさされたり、薬が合わなかったりして時に呼吸困難になったり、血圧が低下したりするのがアナフィラキシーです。薬疹が出ただけの場合や、ワクチンを接種して発疹が出たり唇が腫れたりするだけではアナフィラキシーとはいいません。突然の発症・急速な進行・2 つ以上の臓器の症状があるのがアナフィラキシーです。つまり発疹や唇の腫れなどの皮膚・粘膜症状に加えて、呼吸困難・喘鳴などの呼吸器症状や血圧低下や意識障害などの循環器症状が合わさってはじめてアナフィラキシーといわれます。

発生頻度はインフルエンザワクチン接種と同程度とする報告から、インフルエンザワクチンより若干頻度が高いとする報告までさまざまです。アメリカの報告では、ファイザー社製ワクチン接種では 4.7 回／100 万回接種で、インフルエンザなどの一般的なワクチンによるアナフィラキシー頻度は 2.8 回／ 100 万回接種とされていますので、極端に多いわけではありません。

コロナワクチン接種によるアナフィラキシーが発生しても、適切な処置によりこれまで全員が回復しています。ワクチン接種部位の痛み、熱が出る、倦怠感を感じるなどの副反応が多いようですが、これらの副反応はアナフィラキシーではありませんし、短期間で回復します。

ワクチン接種に際しては、その利益と害のバランスを考えることが大切です。過度の心配は大きな損失をもたらし、ワクチン接種により得られる利益を損なうと思われます。



参考文献：一般社団法人日本アレルギー学会監修
1. 2014 年「アナフィラキシーガイドライン」
2. 2021 年 新型コロナウイルスワクチン接種にともなう重度の過敏症（アナフィラキシー等）の管理・診断・治療。